

# P07 ウダイカンバ主体の大径材生産試験地の現況

網走西部森林管理署

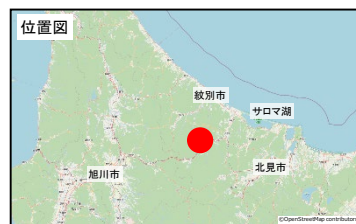
藤沼 龍司  
仲川 知輝

## 調査の背景・目的

網走西部森林管理署管内遠軽町丸瀬布（右図赤点）には1915年に起こった山火事跡地がウダイカンバ主体に天然更新し、大径材生産の試験地として1980年に選定した二次林があります。

この試験地では、主として育成する立木（以下、目的木）と目的木の生育の支障となる立木（以下、支障木）を選定し本数伐採率21%のA区と14%のB区、無施業のC区の合計3箇所を設定し1981年に伐採を実行しました。なお、B区のみ1997年にも70%で伐採を実行しています。※伐採はいずれも支障木のみ

その後、施業効果を判定出来るよう目的木の胸高直径を継続調査しており、伐採から約40年が経過した現況を調査したので報告します。

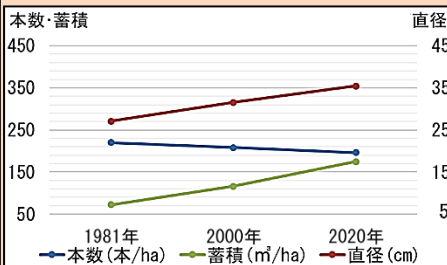


## 調査の内容・成果

### ～ A区(弱度伐採)～

【21%伐採】

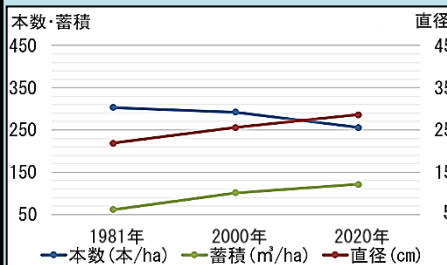
- ・本数は11%自然減
- ・蓄積の増加率は最も高い



### ～ B区(強度伐採)～

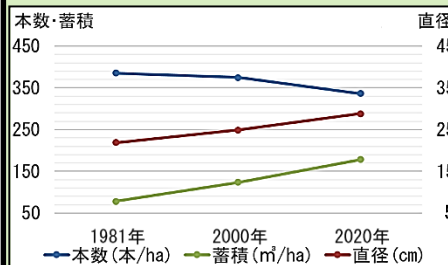
【14%伐採後、追加で70%伐採】

- ・本数は16%自然減で最大
- ・蓄積の増加率は最も低い



### ～ C区(無施業)～

- ・本数は13%自然減
- ・蓄積の増加率はA区に劣る



今回の調査では、1981年からの平均胸高直径の変化は各区とも31～32%と近似した増加率を示しました。一方、蓄積の変化はA区は143%、C区が127%と2倍以上の増加率を示しているなか、B区は97%増加と他区に比べ劣っていることが解りました。

## 考察及び今後の展開

このような結果となった要因として、A区では1981年に実行した弱度の伐採が有効だったと考えられ、B区では1997年に追加で実施した強度の伐採が過度であり目的木のその後の成長過程での枯死につながったと考えられます。このことから立木密度の調整が保残した目的木の成長に大きな影響を与えることが解りました。

以上のように今回は蓄積を主として調査を行いました。今後は枝下高や通直性等の品質についても継続的な調査を進めていきます。